

### 「貧しい者の避け所」

(詩篇14・1-7)

#### 一、「愚か者」の姿

(※ 作者をダビデとして読んだため、「ダビデ」と表記しました。)

この詩篇をどのように読んだらよいでしょうか。詩篇は神のことばの一部であり、正典、すなわち信仰の基準です。その、信仰の基準となる書が語っています。1節です。〈愚か者は心の中で「神はいない」と言う。彼らは腐っていて忌まわしいことを行う。善を行う者はいない。〉と。この詩篇は、表題によれば〈ダビデによる〉詩篇です。ですが、作者がダビデであったとしても、ダビデを超えたことばです。なぜなら正典、すなわち信仰の基準だからです。

こういふふうを受け止めたら、いかがでしょうか。この詩篇は、イエス・キリストが語っていることばであると。主イエスが、父である神を信じようとしない高慢、かつ傲慢な者たちに取り囲まれたときに語ったことばとして受け止めますと、スッと心に入ってきて来るような気がいたします。〈愚か者〉とは「ナバル」で、「愚か」、また「悪い」という意味です。すなわち「愚か者」とは、神の目から見て「愚かな者」「悪い者」の意味です。その特徴は、〈心の中で「神

はいない」と言う〉ことです。「神はいない」とは、「神なんかは存在しない」という意味ではありません。「ダビデが信じているような神なんかはいない。神に逆らう者をさばくような神はいない。現に、われわれは自分が思うとおり生きており、ピンピンしているではないか」と、心の中で言っている者たちです。心の中で語っているからには、それが態度にも、行いにも、ことばにも出て来ている状態です。ゆえに「ダビデ」は、〈彼らは腐っていて 忌まわしいことを行〉っている、語っています。

#### 二、天から見ておられる

そういう「愚かな者」「悪い者」を、神はどのように見ておられるのでしょうか。2節が語っています。〈主は天から人の子らを見下ろされた。悟る者 神を求める者がいるかどうか。〉と。神は天から見ておられます。「愚か者」は、「われわれをさばくことのできる神はいない」と心の中で言っています。しかし神は見ておられます。〈悟る者 神を求める者がいるかどうか〉を。神は天から見届けられました。3節です。〈すべの者が離れて行き だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない。〉と。

だから、どうなのでしょう？「愚か者」を見捨てられたのでしょうか。ここで、新約の光を当てる必要があります。

どんなに愚かな者であっても、悪い者であっても、神が遣わされた救い主イエス・キリストを信じるなら救われます。〈ヨハネ3・16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。〉とあるように。しかしダビデの時代、御子キリストは遣わされていません。「ダビデ」が指摘した「愚か者」は、どうやって救い主を信じたら良いのでしょうか。それは、神のなさる領域ですから、私共が判断することはできません。

#### 三、御霊によって勝つ

詩篇を読みますと、詩篇そのものには書かれていないのですが、御霊の働き、すなわち聖霊の働きが見えてまいります。「ダビデ」は御霊の迫りを覚えたのではないのでしょうか。4節です。

〈不法を行う者は みな知らないのか。彼らは わたしの民を食らいながらパンを食べ 主を呼び求めない。〉と語っています。このことばは、前後関係から分かりますように、文句ではありません。あるいは、力強いことを語って、自分を鼓舞していることばでもありません。聖霊がもたらされた余裕から出た言葉です。神に触れられると、すなわち御霊に触れられると、現実はそのままで変わらないものの、目に入る世界が一変します。物事を見て認知する機能が変わります。そうしますと、次から次へとみこころにかなう思いが生まれてまいります。5節、6節です。〈見よ 彼らは大いに恐れた。神は 正しい一族とともにおられるからだ。おまえたちは 苦しむ者の計画を 踏みじろうとするだろう。しかし 主が彼の避け所である。〉と。御霊に触れることにより、こういう思い、こういう確信が、内側から自然と湧き上がって来るのです。さらに、みこころにかなった祈りに導かれます。それが、7節です。〈ああ イスラエルの救いがシオンから来るように。〉と。祈りことばは続きます。〈主が御民を元どりにされるとき ヤコブは樂しめ。イスラエルは喜べ。〉と。シオンは、エルサレムの神殿があった場所です。ダビデの時代に神殿はありませんでしたが、ダビデは契約の箱を、シオンに造った天幕に運び入れました。シオンはダビデの町と呼ばれ、古代イスラエルにとっての信仰の中心地となりました。シオンにおいて、主の御名があがめられるように、「ダビデ」は祈っています。ちなみにシオンは、私たちにとっては何に当てはまるのでしょうか。教会の礼拝です。イエス・キリストを主と仰ぐ礼拝がきちっと献げられているときに、教会に組み合わされている私たち一人ひとり、本来のあるべき姿に回復されて行きます。